

## 第1節 低炭素社会の構築(地球温暖化の防止)

### 1 温室効果ガスの排出削減

#### 1-1 地球温暖化対策の推進

##### (1) 地球温暖化問題の経緯

地球温暖化とは、人間の社会経済活動に伴い、大気中の二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)などの「温室効果ガス」が増加し、地球の平均気温が上昇することをいいます。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の最新の報告書「第5次評価報告書」によると、温室効果ガスの排出がそのまま続くと今世紀末には平均気温は最大で4.8℃上昇、海面水位は最大で82cm上昇すると予測されています。こうした地球温暖化の進行に伴う気候変動は、生態系や人類にさまざまな影響を及ぼし、予想される影響の大きさや深刻さから、世界的な危機をもたらす最も重要な環境問題の一つとなっています。この危機に対処するため、平成4(1992)年5月に地球温暖化防止の枠組みとなる条約「気候変動に関する国際連合枠組条約」が採択されました。

同条約に基づき毎年締約国会議が開催され、平成9(1997)年に京都で開催された気候変動枠組条約第3回締約国会議(COP3)では、先進各国の温室効果ガス削減目標を取り決めた「京都議定書」が採択されました。

平成22(2010)年にメキシコのカンクンで開催された第16回締約国会議(COP16)では、世界の平均気温上昇を産業革命前に比べて2℃以内に抑えるために、各国が平成32(2020)年までの自主的な削減目標や行動を定めました(カンクン合意)。

平成27(2015)年にパリで開く第21回締約国会議(COP21)では、全ての国が参加する平成32(2020)年以降の温室効果ガス排出削減の新たな目標が決定します。

##### (2) 国における取組

日本は、平成9(1997)年に京都で開催されたCOP3で、第一約束期間(平成20(2008)年から平成24(2012)年)に温室効果ガス排出量を平成2(1990)年に比べて6%削減することとしました。この目標を達成するため、平成17(2005)年4月に地球温暖化対策の推進に関する法律に基づく京都議定書目標達成計画を策

定し、地球温暖化対策を推進してきましたが、京都議定書の基準年である平成2(1990)年から平成19(2007)年までの国内の温室効果ガス排出量は増加傾向にありました。

このため、国は地球温暖化対策の強化を図るため、平成20(2008)年3月に京都議定書目標達成計画を大幅に改定し、自主行動計画の推進や住宅・建築物の省エネルギー性能の向上、トッパンナー機器対策、自動車の燃費の改善などの追加対策を講じています。その結果、京都議定書第一約束期間については、国全体としては温室効果ガスを6%削減する目標が達成されました。

日本は続く第二約束期間に参加していませんが、地球温暖化対策推進本部(本部長:内閣総理大臣)は、平成32(2020)年までに2005年度比3.8%削減するカンクン合意に基づく目標達成に向けて、引き続き地球温暖化対策に積極的に取り組んでいく方針を示しています。

わが国における平成25(2013)年度の温室効果ガス排出量は、14億800万t-CO<sub>2</sub>と前年に比べて増加しており、1990年度比で10.8%の増加となっています。

なお、温室効果ガスの排出量を削減するための緩和策に取り組む一方、温暖化によって起こりうる影響に対応するための適応策に関する取組も進められています。

表1-1-1 日本の温室効果ガス排出量の推移

	1990年 (百万CO <sub>2</sub> トン)	2013年 (百万CO <sub>2</sub> トン)	伸び率 (%)
二酸化炭素(CO <sub>2</sub> )	1,154	1,311	13.6
メタン(CH <sub>4</sub> )	48.6	36.0	-25.9
一酸化二窒素(N <sub>2</sub> O)	31.9	22.5	-29.5
代替フロン類	35.4	38.6	+9.0
計	1,270	1,408	10.8

※ただし、1990年の代替フロン類については1995年の値

##### (3) 県における取組(温室効果ガス削減対策)

本県では、地球温暖化対策の推進に関する法律の趣旨をふまえ、県民総参加により地球温暖化対策に取り組むため、平成11(1999)年度に「三重県地球温暖化対策推進計画(チャレンジ6)」を策定して、温室効果ガスの排出量を平成22(2010)年度までに平成2(1990)年度比で6%削減することを目標に、各対策に取り組ましました。

平成19（2007）年3月には、それまでの対策の内容やその成果を検証するとともに、京都議定書目標達成計画の内容との整合を図るため、計画の見直しを行い、平成22（2010）年度目標を平成2（1990）年度比で3%削減に修正しました。

しかし、既定計画については目標年度を迎えたことから、地球温暖化問題の解決に向けて、県民、事業者と将来像や目標を共有しながらさまざまな主体が力を発揮し、広く低炭素社会の実現に向けた施策を展開していくことが大切であるとして、平成32（2020）年度を目標とする「三重県地球温暖化対策実行計画～低炭素社会の実現に向けて～」を平成24（2012）年3月に策定しました。この計画では、県民、事業者、行政等のさまざまな主体が力を合わせて地球温暖化対策に取り組むことによって、新たな豊かさを実感できる低炭素社会の実現をめざすこととしています。また、平成25（2013）年12月には、三重県地球温暖化対策推進条例を制定しました。（平成26（2014）年4月1日施行）

平成24（2012）年度における三重県域温室効果ガスの総排出量（森林吸収量を含む）は、28,195千t-CO<sub>2</sub>で、平成2（1990）年度比6.9%増となっています。

また、本県における平成24（2012）年度二酸化炭素排出量は27,297千t-CO<sub>2</sub>であり、全国の排出量 1,296 百万 t-CO<sub>2</sub>の約2%を占めています。部門別にみると、産業部門の割合が56.2%となっており、全国の産業部門の割合（32.7%）より高くなっています。

図1-1-1 三重県の温室効果ガス排出量の推移

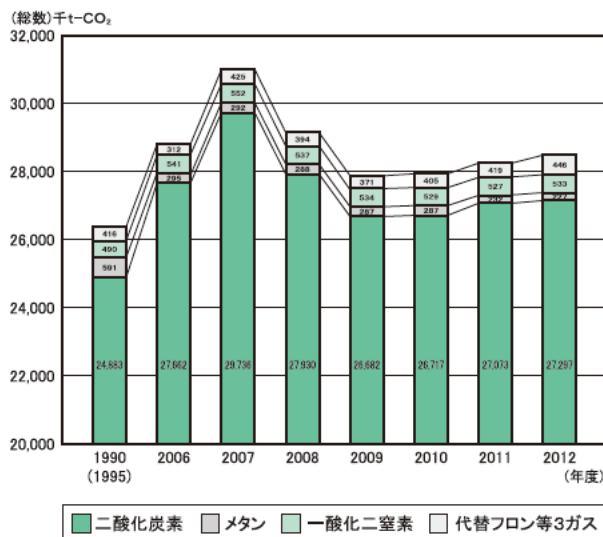
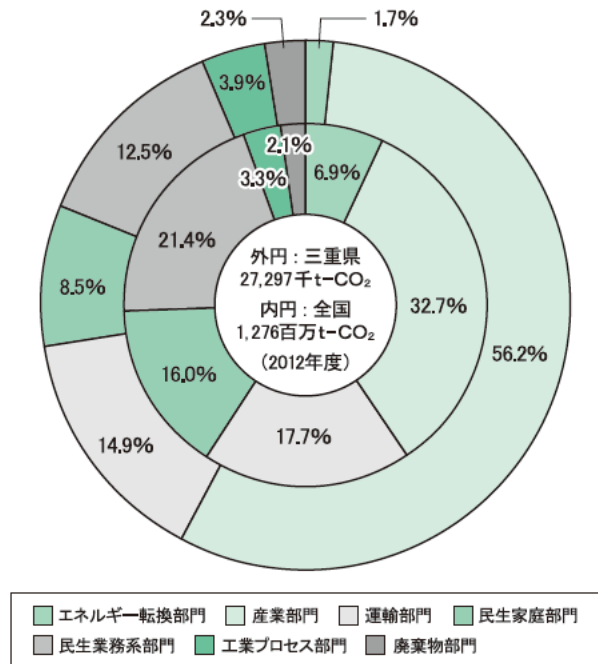


図1-1-2 三重県の部門別二酸化炭素排出量の構成



① 産業部門の対策

三重県地球温暖化対策推進条例に基づき、第一種および第二種エネルギー管理指定工場等に対し、平成26（2014）年度から平成28（2016）年度までの3か年度における自主的な温室効果ガスの排出抑制などに関する計画（地球温暖化対策計画書）の作成を求め、公表しています。

② 運輸部門の対策

三重県生活環境の保全に関する条例において、一定規模以上の駐車場の管理者等に対して、利用者へのアイドリングストップの周知を規定するとともに、自動車の使用者に対して、駐車時のアイドリングストップを規定し、自動車からのCO<sub>2</sub>等の排出削減を進めています。

平成26（2014）年度は、日本自動車連盟三重支部と連携して、エコドライブの運転技術の競技会を開催しました。

また、企業連携取組の一環として四日市市の霞ヶ浦地区環境行動推進協議会（KIEP'S）、朝日町の朝日町企業エコネットが実施するエコ通勤を支援しました。

○電気自動車等を活用した低炭素社会モデル事業  
地球温暖化問題の解決に向けては、地域の住民、事業者、行政等のさまざまな主体が将来像や目標を共有しながら力を合わせて低炭素社会の実現に向けた施策を展開していくことが望まれています。

交通・移動に関しては、多くの化石燃料に依存した暮らしから、省エネルギーでかつ豊かな低炭素社会に移行していくため、電気自動車等を活用した移動手段の新たな使い方を検討し、取組を進めることを目的とする「地域と共に創る電気自動車等を活用した低炭素社会モデル事業」を平成24（2012）年度にスタートさせました。

平成24（2012）年度は、「電気自動車等を活用した伊勢市低炭素社会創造協議会」を設立し、行動計画「おかげさまAction! ～住むひとも、来たひとも～」を策定しました。

平成25（2013）年度には、協議会で一人乗り電気自動車「コムス」4台と二人乗り電気自動車「超小型モビリティNTN」5台を導入しました。一人乗り電気自動車については、伊勢市の「ええやんか！マイバック（レジ袋有料化）検討会」からレジ袋有料化による収益金の一部の寄付と国土交通省の超小型モビリティ導入促進事業による補助を受けて購入しました。二人乗り電気自動車については、株式会社NTNから貸与を受けたもので、国土交通省の進める超小型モビリティの認定制度により中部運輸局管内で初めて認定を受けました。

また、「ピカチュウ」のデザインがラッピングされた電気バスが路線バスとして導入され、宇治山田駅前から内宮前までの区間を毎日6往復運行されています。ラッピングについては、協議会の低炭素な取組に賛同いただいた株式会社ポケモンからデザインの提供を受けています。

導入した小型電気自動車は、商店街や伊勢楽市で展示するなどの普及啓発や観光ドライブルートの作成検討に活用しました。

さらに、電気自動車等で周る観光ドライブコースやシンボルマーク等のデザイン、充電器設置ガイドブックを作成しました。防災訓練で電気自動車を電源として活用する取組も進めています。

平成26（2014）年度には、観光プランの作成・活用として、モニターツアーや、電気自動車や電気バスで周るエコスタンプラリーを実施し、周遊マップも作成しました。また、小型電気自動車等の活用検討として、コムスや超小型モビリティNTNを、伊勢市、伊勢商工会議所、伊勢市観光協会等で活用しました。さらに、充電施設の普及を進め、観光施設や宿泊施設等への設置を促進し、充電器マップを作成しました。電気自動車等の普及啓発として伊勢市内の企業等において電気自動車が導入されるとともに、多くのイベント等で電

気自動車の展示・試乗会の実施、雑誌・広報誌による広報に努めました。また、協議会の作業部会において、ニュースレターを作成しました。そして、前年度に引き続き、災害時の電気自動車活用として、防災訓練で電気自動車を電源として活用しました。

### ③ 民生家庭部門の対策

平成16（2004）年度から地球温暖化防止活動の拠点として、地球温暖化対策の推進に関する法律に基づき、「三重県地球温暖化防止活動推進センター」を指定しています。また、地域における活動の推進役として「地球温暖化防止活動推進員」を県内で87名に委嘱（平成27（2015）年4月1日現在）し、県民や事業者に向けて地球温暖化対策の普及啓発を行っています。

### (4) 三重県庁の温室効果ガスの排出量削減

県庁では、省エネ法や「三重県地球温暖化対策実行計画」に基づいて、電気使用量や廃棄物の削減など環境負荷の低減に取り組んでいます。

また、「三重県地球温暖化対策実行計画」では、県の事務事業の実施により排出される温室効果ガス排出量を平成32（2020）年度に基準（平成17（2005）年）年度比で20%削減することを目標としています。

平成26（2014）年度の温室効果ガスの排出量は、基準年度と比べて12.6%減少しました。

項目別にみると「電気」は7.6%減少、「公用車燃料」は1.6%減少、冷暖房用燃料は34.8%減少、「その他」は36.8%減少しています。

表1-1-2 三重県庁の温室効果ガス削減状況

項目	平成17年度 (t-CO <sub>2</sub> )	平成26年度 (t-CO <sub>2</sub> )	基準年度比 (%)	平成32年度 温室効果ガス 排出目標 (t-CO <sub>2</sub> )
電気	59,266	54,770	92.4	47,412
公用車燃料	5,906	5,810	98.4	4,724
冷暖房燃料 (電気除く)	10,791	7,038	65.2	8,632
その他(※1)	5,210	3,291	63.2	3,225
合計	81,173	70,910	87.4	63,993

※1 「その他」は、発電機、船舶、水田、家畜等から排出される温室効果ガスです。

※2 合計については、端数処理の関係で数値が合わない場合があります。

### (5) 適応の推進

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、最新の報告書「第5次評価報告書」において、「ここ数十年、気候における変化は、全ての大陸と海

洋にわたり、自然及び人間システムに影響を与えている。」とし、気候変動に伴う「高潮、沿岸洪水、及び海面水位上昇」「洪水」「極端な気象現象」「極端な暑熱」「干ばつ、降水の変動等」「生物多様性、生態系機能等の喪失」による生命、健康、生計崩壊、インフラ網、食料、飲料水等への主要なリスクを特定しました。私たちが地球温暖化に対してとるべき主な対応策は、「温暖化防止」と呼ばれている「緩和」によって温暖化の進行を防ぐことと、温暖化の影響に対応した人間社会の調整の「適応」の両方が必要となってきています。

県内の気象についても、平均気温の上昇や、真夏日、熱帯夜が増加する傾向があり、冬日が大幅に減少しつつあります。気候変動による影響は、県民の暮らしにおいて、安全、健康、経済的な豊かさ、快適、文化や歴史など、さまざまな側面におよび、一人ひとりの生活と密接に関わります。このような影響から、人命、健康、利便性や快適さ等を守り、暮らしにおける安全・安心を確保するためには、起こりうる被害を和らげたり、予防的に早くから対処したりするといった「適応」を考えていく必要があります。

このため、県内で既に起きている温暖化の影響と思われる気候の変化と将来影響について記載した「三重県気候変動影響レポート2014」を平成26（2014）年10月に作成して、県民の皆さんにお知らせしました。

## 1-2 フロン対策の推進

### (1) オゾン層の保護

オゾン層の破壊は、冷蔵庫やエアコンの冷媒、断熱材の発泡剤、プリント基板の洗浄剤などとして広く使用されてきたフロン（クロロフルオロカーボン等）が成層圏に達してから分解され、生じた塩素原子がオゾン分子を破壊するものです。オゾン層は、太陽から降り注ぐ有害な紫外線を吸収しており、その破壊により、ガン発生率の増加など人体への影響のほか、植物の成長抑制や水生生物への悪影響等、生態系全体への影響が懸念されています。

このため、国際的には、オゾン層の保護を目的としたウィーン条約が締結され、これに基づくモントリオール議定書により、フロンの生産・使用の段階的削減が進められており、平成7（1995）年末には先進国、平成21（2009）年末には発展途上国における特定フロンのCFC（クロロフルオロカーボン）の生産および輸出入が全廃され

ました。同じく、特定フロンのHCFC（ハイドロクロロフルオロカーボン）については、先進国では平成32（2020）年、発展途上国では平成42（2030）年に原則全廃することとなっています。

わが国においても、昭和63（1988）年にオゾン層保護法が制定され、その後、平成10（1998）年に家電リサイクル法、平成13（2001）年にフロン回収破壊法が制定されたことで、フロンの排出抑制、回収・破壊処理の取組が進められています。

また、平成25（2013）年6月のフロン回収破壊法の改正により、より一層フロン類の大気中への排出を抑制する取組が各関係事業者等に求められるようになりました。

### (2) フロンの適正な管理と回収処理の促進

#### ① 特定家庭用機器再商品化法（家電リサイクル法）

家庭や事務所から排出される特定家庭用機器廃棄物について、消費者が収集・運搬および再商品化等の料金を負担し、小売業者は消費者から引き取り、製造業者等へ引き渡す義務を負い、製造業者等は再商品化等（リサイクル）する義務を果たすことを基本とした家電リサイクル法が平成10（1998）年度に制定され、平成13（2001）年4月から本格施行されています。

#### ② フロン類の使用の合理化及び管理の適正化に関する法律（フロン排出抑制法）

業務用冷凍空調機器（第一種特定製品）およびカーエアコン（第二種特定製品）からフロンを放出することを禁止し、機器が廃棄される際にフロン回収等を義務づけたフロン回収破壊法（特定製品に係るフロン類の回収及び破壊の実施の確保等に関する法律）が平成13（2001）年6月に制定され、平成14（2002）年4月に第一種特定製品部分が、同年10月に第二種特定製品部分が本格施行されました。その後、平成17（2005）年1月の使用済み自動車の再資源化等に関する法律（自動車リサイクル法）の本格施行に伴い、第二種特定製品部分については自動車リサイクル法に移行しました。

平成25（2013）年6月には、フロン回収破壊法がフロン排出抑制法に改められ、第一種特定製品の管理者や第一種フロン類充填回収業者（旧第一種フロン類回収業者）等、フロンのライフサイクル全体を対象として、各主体に新

たな義務が課されました。

改正法は、平成25（2013）年9月に一部規定（再生業の許可申請等）が施行され、平成27（2015）年4月1日に全面施行されました。

### ③ フロン排出抑制法に基づく充填回収業者の登録

業務用冷凍空調機器からフロンを充填・回収する業者（第一種フロン類充填回収業者）は、フロン排出抑制法に基づく都道府県知事等の登録が必要です。また、回収したフロンを破壊する業者（フロン類破壊業者）および再生する業者（フロン類再生業者）は、主務大臣（経済産業大臣、環境大臣）の許可が必要です。

第一種フロン類（充填）回収業者登録  
731件（平成27（2015）年3月31日現在）

## 1-3 省エネルギー化の推進

### (1) 省資源・省エネルギー対策の推進

省エネルギーによる温室効果ガスの排出削減は不可欠であることから、県民、事業者、行政が一体となって省エネルギーを推進しています。

具体的な取組例としては、「クールアース・デー」を中心に「三重県地球温暖化防止/ライトダウン運動」への参加を県内の事業所や市町などに呼びかけて、不要な照明施設等の消灯を行うようにしています。その他に「みえ環境フェア2014」のイベントなどを通して、県民、事業者に省エネ・節電の普及・啓発を行っています。

さらに、夏季と冬季においては電力需要が大きくなることから、安定した電力供給が行われるよう、県としては県民、事業者などに省エネ・節電の呼びかけを行っています。

### (2) 信号機の高度化改良とLED式信号灯器の整備

幹線道路における交通の円滑化を図るため、信号機の系統化（4基）、多現示化（5基）、半感応化（7基）等の信号機の高度化改良を行うとともに、主要交差点においてLED式信号灯器（550灯）の整備を進めることにより消費電力の削減を図っていきます。

### (3) 環境に配慮した住宅・住環境の普及促進

地球温暖化防止の観点から、省エネルギー・資源の有効利用などの面で配慮がなされた住宅の普及促進や、自然環境に調和し、親しめる住環境の普及促進を図るとともに、優良な住宅のストックを進めていきます。

これらの取組が、県・市町・住宅関連事業者などによって計画的かつ持続的に実施できるよう、「三重県住生活基本計画」においても位置づけています。

## 2 森林吸収源の整備

### 2-1 森林の公益的機能の向上

森林は、水源のかん養、土砂災害防止をはじめ、保健・文化・教育的利用の場の提供など多様な機能を有するとともに、CO<sub>2</sub>を吸収する働きにより地球温暖化防止にも貢献しています。

こうした森林の機能を発揮するには、適正な管理を継続的に行うことが必要であり、林業は木材生産活動を通じて、その役割を担ってきました。

しかし、林業を取り巻く情勢は厳しく、採算性の悪化、高齢化等による担い手不足のため、放置される森林が増加するなど、林業経済活動による森林の公益的機能の発揮は困難になり、森林の機能低下が進み、県民生活への重大な影響が危惧されています。

このため、公益的機能の発揮を図るため間伐を計画的に実施するとともに、造林事業等の森林整備に直結した林道事業や荒廃山地の復旧等を行う治山事業を実施しました。

### 森林の保全・育成

森林の持つ公益的機能を高度に発揮させるため、森林GIS（地理情報システム）を活用し、市町や関係者と協働し、森林を生産林（持続生産を重視する森林）と環境林（公益的機能を重視する森林）に区分（ゾーニング）しています。生産林では、林業生産活動を通じて森林の整備を促進し、また、環境林を公共財として位置づけ、針葉樹と広葉樹が混交した森林を造成するなど、公益的機能の高度発揮をめざした森林整備を進めています。

### 2-2 森林のCO<sub>2</sub>吸収機能の「見える化」

#### 三重県森林CO<sub>2</sub>吸収量評価認証制度

本県では、企業、団体等が整備した森林のCO<sub>2</sub>吸収量を認証する制度を定め、企業が前年度に実施した森林整備に応じて1年分の吸収量を認証し、森林のCO<sub>2</sub>吸収機能の「見える化」を推進しています。

平成26（2014）年度は、5企業の森林CO<sub>2</sub>吸収量を認定しました。

### 3 新エネルギーの導入

#### 3-1 エネルギー・資源の利用状況

##### (1) 電気

平成25（2013）年度における県内総発電量は35,946×10<sup>6</sup>kWhで前年度に比べ7.6%減少しました。その内訳は図1-1-3のとおりです。

一方、平成25（2013）年度の県内総需要量は対前年比0.35%増の17,988×10<sup>6</sup>kWhであり、需要量の内訳は、一般家庭などの電灯使用量が23.7%、業務用などの電力使用量が76.3%となっています。

電灯・電力使用量の推移は図1-1-4のとおりです。

図1-1-3 三重県の総発電量  
(平成25年度)

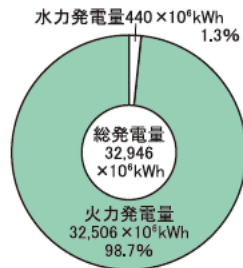
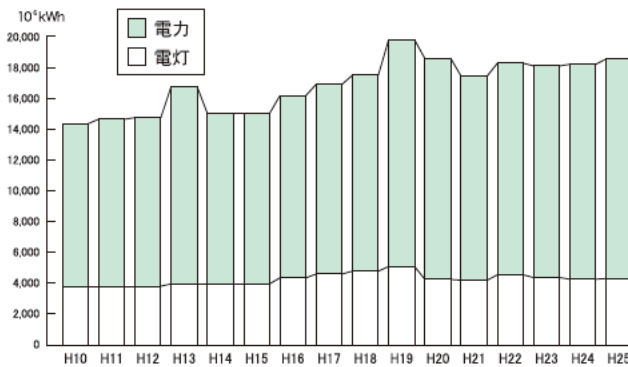


図1-1-4 電灯・電力使用量の推移

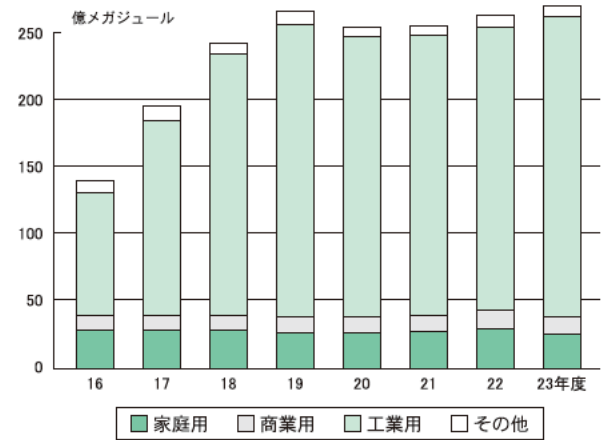


##### (2) ガス

平成24（2012）年度の都市ガス販売量は258億9,084万MJで、その内訳は家庭用が10.5%、工業用が80.8%、商業用が5.0%、その他が3.7%となっています。

都市ガス販売量の推移は図1-1-5のとおりです。

図1-1-5 都市ガス販売量の推移



資料 各事業者

#### 3-2 導入への取組

##### (1) 三重県新エネルギービジョン

石油依存度の高いわが国のエネルギー事情や地球温暖化等の環境問題に対応するため、新エネルギーの導入促進が強く求められています。

新エネルギーは、地域に密着したエネルギーであることから、地域の特性に応じた導入を図ることが効果的であり、県、市町、NPO、民間企業、住民等が主体的かつ連携・協力して取り組む必要があります。

このため、本県では「三重県新エネルギービジョン」に基づき、その具体化のために次のことに取り組むとともに、東日本大震災以降のエネルギー情勢の変化などをふまえ、新エネルギービジョンの改定を行い、平成32（2020）年度末導入目標（表1-1-2）を設定しました。

##### ① 「公共施設等への新エネルギーの導入指針」による率先導入

この指針は、県の施策方針として新エネルギーを県の施設へ率先導入するため、各部が取り組むべき内容を示したものです。

平成26（2014）年度には、県の交通安全施設へ計0.04kWの太陽光発電設備を導入し、累計1,222kWとなりました。

##### ② 新エネルギーの普及支援事業の実施

県内への新エネルギー導入を促進するため、小規模な新エネルギー設備を設置する事業者や個人に対して導入支援事業を実施しています。

平成26（2014）年度においては、1事業所、55世帯で、太陽熱利用設備やバイオマス熱利用設備等が設置されました。

# 第1章 環境への負荷が少ない持続可能な社会づくり

## 1章1節

●低炭素社会の構築（地球温暖化の防止）

### ③ 新エネルギーの普及啓発

出前トーク等を開催し、新エネルギーの普及啓発を行いました。

表1-1-2 2013年度末新エネルギー導入量

	新エネルギー ビジョン策定時 2010年度末	2013年度末 導入量	2020年度末 導入目標
太陽光発電	65,667 kW	340,693 kW	536,000 kW
太陽熱利用	—	1,572 kl	20,000 kl
風力発電	72,054 kW	72,655 kW	245,000 kW
バイオマス発電	45,310 kW	48,090 kW	76,000 kW
バイオマス熱利用	32,065 kl	52,654 kl	65,000 kl
中小規模水力発電	—	549 kW	4,000 kW
コージェネレーション	437,317 kW	446,206 kW	511,000 kW
うち燃料電池	1,162 kW	1,786 kW	42,000 kW
グリーンエネルギー自動車	25,170 台	72,232 台	282,000 台
ヒートポンプ	—	89,900 台	122,000 台
CO <sub>2</sub> 排出削減量 (参考)	約71万t-CO <sub>2</sub>	約107万t-CO <sub>2</sub>	約177万t-CO <sub>2</sub>

### (2) 水力発電の推進

水力発電は、ダム等に蓄えた水のエネルギーを有効利用しCO<sub>2</sub>を排出しないクリーンなエネルギーを供給しています。

平成26（2014）年度の供給電力量は約6,919万kWhでした。

なお、県では昭和29（1954）年より水力発電所の運転を行ってきましたが、平成27（2015）年4月1日に全ての水力発電所を中部電力株式会社へ譲渡しました。

### (3) 木質バイオマス発電の推進

平成24（2012）年7月より始まった再生可能エネルギーの固定価格買取制度により、間伐材等の未利用資源の活用と山村経済の活性化を図るため、木質バイオマス発電を推進しています。既に、松阪市において県内初の木質バイオマス発電施設が平成26（2014）年11月から稼働しているほか、平成28（2016）年夏の営業運転に向け、津市や多気町でも木質バイオマス発電所建設が進められています。

### (4) 農業用水を活用した小水力発電の導入

農村地域において、農業用水等を利用した小水力発電等の整備の促進を図り、農業用施設での発電電力使用による地域活性化、自立分散型電源確保に寄与することにより、農村の生活環境や生産

基盤整備、防災対策を通じて、生産性の向上や安心・安全な農山漁村づくりを進めます。

平成26（2014）年度は、農業用水を活用した小水力発電施設について、中勢用水地区において発電施設の整備に着手しました。また、これまでに実施した賦存量調査を基に、小水力発電の可能性のある農業水利施設の発電量等の情報を記載した「農業水利施設を活用した小水力発電マスタープラン」を策定しました。

### (5) 水道施設への小水力発電の導入

水道管内の水が持つ余剰エネルギーを有効利用するため、小水力発電設備を導入しています。

## 3-3 未利用エネルギーの利用促進

### (1) RDF焼却・発電事業の推進

可燃性ごみを固形燃料（RDF）化し、ごみの持つ未利用なエネルギーを有効に利用する取組を、市町と一体となって行っています。県は市町で製造されたRDFの安定的な受け皿として、三重ごみ固形燃料発電所（RDF焼却・発電施設）を管理運営し、ごみの持つエネルギーを利用して発電を行っています。

平成26（2014）年度の供給電力量は約5,030万kWhでした。

#### ①RDF処理能力

240 t / 日

#### ②最大出力

12,050 kW